



坂本里坊の庭園

里坊の起こりと庭づくり

元龜2年(1571)9月、織田信長による比叡山の焼き打ちをよく知られている事件です。その際、延暦寺の門前町であり、山上への物資調達の基地として栄えた坂本の町もほとんど焼き払われてしまいました。

その後、豊臣秀吉によって延暦寺の再興がすすめられ、徳川家康もこれを援助して、坂本も復興しました。しかし寺の勢力の衰退によって経済的な地盤も低くなり、中世の繁栄に戻ることなく、今日見られるように里坊を中心とする静かな町なみがだんだんとつくられてきたのです。

それは近世になって天台座主が滋賀院門跡として坂本に常住されるようになったからです。ここが延暦寺の本坊となると多くの僧徒が山を下って住まいしました。ことに山上で修行ひとすじに過ごし、60歳をこえた老僧は座主より「里坊を賜う」と称して坂本に住坊を構えることが許されたのです。

比叡山上は研学修行の道場として、きびしい戒律が守られていました。したがって昔は山坊に趣味的な庭を作るといふことはありえませんでした。それに対して山下の里坊では老僧がのびのびとした気持ちで余生をたのむため、住まいに応じて工夫をこらした庭づ



寿量院庭園

くりが行われるようになったのも自然のなりゆきといえるでしょう。

里坊庭園の特色

里坊は現在49坊が伝えられ、坊跡も10ヶ所とされています。いずれも穴太衆積みで名高い素朴な野面積石垣を外構えとし、それがつらなる落付いたたたずまいは歴史的な町なみとして高く評価されています。

石を扱うすぐれた技術のあったことは庭を作るのにも生かされてきたことでしょう。近くから庭石に適した山石や川石が豊富に得られることは庭づくりに好都合でした。どの庭にも石が多く、しかもなかなか立派な石が用いられています。山裾の土地がただけに地形に変化があり、谷川からの豊かな水を引くこ

とができるのも幸いでした。そのため里坊には池の庭と、ほどよい傾斜地を巧みに利用した流れの庭が主体となっています。いわゆる枯山水の庭はごく僅かです。

里坊はもともと隠居所であったことから住まいの庭の要素が強く感じられます。全体的にみると、日常生活の憩いの場所として、飽きのこない親しみ深さが印象づけられるのです。

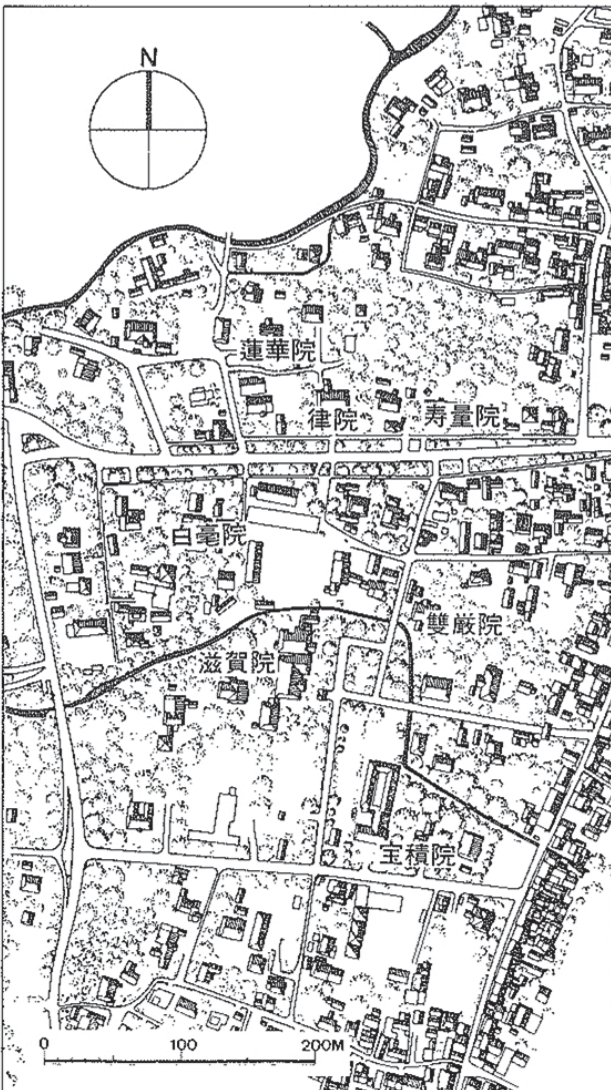
作庭に関する史料がほとんどないため、はっきりとしたことは言えませんが、古いものでも江戸時代の初めということになるでしょう。庭は時と共に樹木は生長し、枯れたり植え替えられたり、自然生えの実生が育って景色が変わります。石組が崩れたり、池や流れには土砂がたまりまます。現存する里坊の建築は江戸中・末期のものが多く、近代の建て直しもあることから、それに応じて庭園もまた、たびたび修理改造されてきました。

たとえば池や流れの岸に平たい石を水面に差し出した覗き石といわれる配石は、里坊庭園の随所に目立つ一つの特色ですが、これは江戸末期の手法と思われます。また火袋に火口を加工するほかはすべての部分を自然石で組み立てた山燈籠（火口のない石を用いたものは化燈籠といいます）が多く庭に据えています。これも江戸末期からの好みで、燈籠として姿の良い物とはいえません。これらはおそらく当時の坂本の庭師たちが流行させたのでしょう。

ともあれ坂本里坊の庭園群は全国的にみても有数のものです。近年、著名な庭園が春秋2回、公開されるようになりました。その機会には是非共心ゆくまで鑑賞していただきたいと思います。

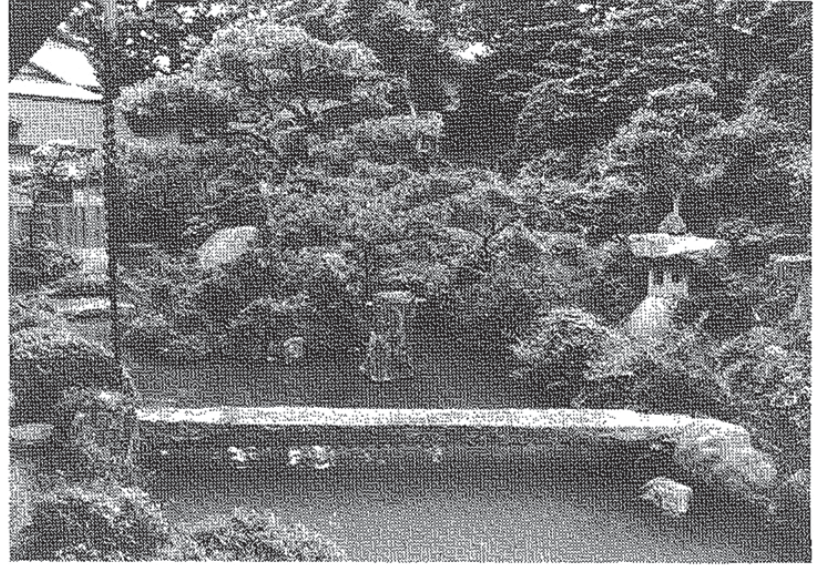
池と流れの庭のいくつかについて

滋賀院庭園 辰殿西側の細長い池庭で、ほぼ中央に架けられた長さ 5.1m、幅50cm弱の細長い石橋が見事です。平らな上面に対して側面に石を割ったときの矢(くさび)の跡や、



坂本里坊の位置図 一大津市教育委員会提供一

ざんぐりとした割れ肌を残していますので直線の堅さがやわらげられて、風情があります。その対岸に滝があり、3 m近い水落石の両側手前の脇石がよくきいています。滝口を境に北側は石垣を積んで上方台地との土留めとし、南側は斜面を築山に見立てて景石を配しています。石橋をはさんで中島や岩島・浮石との取り合わせを考えた意匠といえるでしょう。池畔には大きい四角形と三角形の覗き石が見られます。



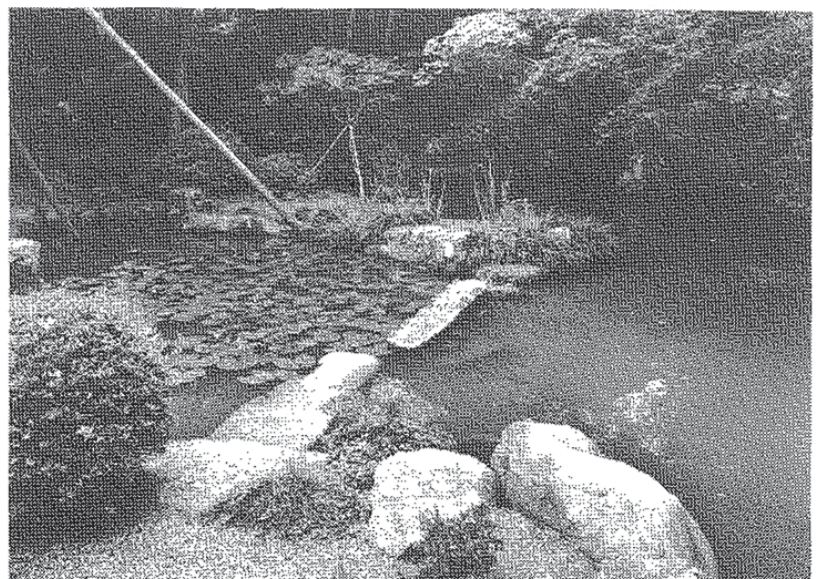
滋賀院庭園

宝積院庭園 書院より眺める南庭で、南部より西部につづく起伏のある築山を背景に池が設けられ、手前の岸の中央部には2.5m×2.1m、厚さ75cmもある平たい石を池中に乗り出させて全庭の要としています。南部築山の向かって右手には斜めと縦に組んだ石の上に石樋をつき出して一条の滝を落とし、左手には小丘をはさんで枯滝石組とみられる立石群があります。これら一帯の石組は大へん力強く、古い手法が感じられます。



宝積院庭園

旧白毫院庭園 いまは芙蓉園という料亭になっていて、いつでも自由にお庭が見物できます。書院の南にひろがるかなり広い池庭で南西隅より5 mもの滝が落ちています。池の東部に大ぶりの栗石を敷きつめた出島を設け手前の岸から渡れるように2枚の細長い板石を沢渡り風に浮べているのは珍しい意匠です。東南部山畔の三尊形式の枯滝を主とした一群の豪華な石組や、庭の入口にある築山の下を切石積みの洞窟とした施設など、見所の多い庭園です。



旧白毫院(芙蓉園)庭園

律院庭園 美しい流れの庭で、書院の南側が広く、大きい中島があるので流れが2つに分かれ、合流して東側から北へとめぐっています。点々と千鳥に石を配して、自然の小川を見るような趣です。西の取水口の奥に高さ1.6m、幅60cmの立石で滝を作り、勢いよく水が落ちるようにしてありますが、目立たない場所にあるだけに水音を楽しむためのしつらえのようです。南側築山の東隅に東屋あづまやを設け、高いところからも庭を眺めるようになっています。

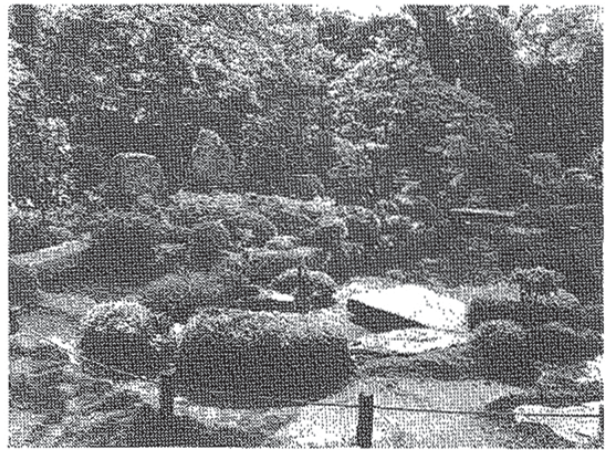
雙巖院庭園 書院の南の流れの庭で、水を取り入れている西部が高く、しっかりとした石組の下を水がくぐって4段の瀑流となっています。流れの中央部は幅が広く、小さい中島を配し、四角い覗き石が目をはきます。対岸正面の三尊形式の立石も良く、広い庭の景色をはきしめるのに効果的です。元禄時代の仏足石や寛政時代の五重の層塔が置かれ、流れに架かる5つの石橋で園路がめぐらされています。

蓮華院庭園 里坊の中では最も古い庭といわれ、南部築山西奥の立派な三尊石（そばに南北朝時代の宝篋印塔ほうけあいつとうがあります）や、庭門を入った所に据えられた3個の巨石にその名残りをとどめています。後世に改造されて流れの庭となりましたが変化のある流路です。

寿量院庭園 安政3年(1856)に覚宝というお坊さんが復興されたとき、庭も作り替えられたという記録があり、その際、かなりの石が運びこまれたようです。書院南の池庭ですが、正面奥の築山にも池にも大きな石が組んであります。池の中央部に2m余りの2枚の切石で橋を架けていますが、その継ぎ目を支える台石の両側に立てた石がしゃれています。池中には3個の浮石がありますが、特に石橋左手の巨石(2m×1.6m)は小さい池に対して思いきった意匠です。その近くの舟石には崩屋形くずれやの燈籠をのせています。同じ好みのものが東岸の石の上にもあって作者の趣味がうか



律院庭園



雙巖院庭園



蓮華院庭園

がわれます。

(庭園文化研究所 村岡 正氏提供)

参考文献

- 中野楚溪著 図鑑・近江の林泉 1936年
- 延暦寺編 比叡山 1954年
- 川崎透編集 比叡山門前町坂本 1980年
- 大津市教育委員会 坂本町なみ調査報告 1980年